

伝七ステーション

～映像制作から創る
持続可能な社会の実現～

伝七ステーション メインナビゲーター
三重テレビ「三重県応援団」団長
株式会社伝七ステーション代表取締役

瀬瀬 智英



発行所
三重県地方自治研究センター
三重県津市栄町2丁目361番地
(一)三重県地方自治労働文化センター内
TEL059-227-3298
FAX059-227-3116
<http://www.mie-jichiken.jp/>
info@mie-jichiken.jp

はじめに

新型コロナウイルスの急速な蔓延を受けて、7都府県に緊急事態宣言が発出されたのが4月7日。その後、16日夜には対象地域を全国に拡大することを政府は正式に決めるなど、私たちを取り巻く環境は日々刻々と変化しています。地方自治を担う皆様におかれましては、連日大きな決断に迫られる毎日を送られていることを拝察し、感謝申し上げます。

株式会社伝七ステーションは、三重県の魅力発信にまつわる映像制作業務を主としています。取材のため県内各地域に赴く機会が多くありますが、この度の緊急事態宣言や社会の要請を踏まえた感染防止対策として、社員のテレワーク導入等を実施した他、制作しているテレビ番組放送については当面の間、番組取材によらない形で構成するなど、臨機応変な対応を今後も採用してまいります。

さて、三重県は4月に、「みえ県民力ビジョン」が掲げる基本理念「県民力でめざす『幸福実感日本』の三重」を具体化するための取り組み方向を示す中期の戦略計画として、みえ県民力ビジョン・第三次行動計

画を策定されました。新たな視点として、「Society 5.0」と「SDGs」を取り入れられたことが印象的です。SDGsにおける17番目の目標（ゴール）に紐づくターゲット17は「さまざまなパートナーシップの経験や資源戦略を基にした、効果的な公的、官民、市民社会のパートナーシップを奨励・推進する。」とあります。この度の、みえ県民力ビジョン・第三次行動計画が、「三重県らしい、多様で、包容力ある持続可能な社会の実現」に向けて、多様なステークホルダーとのパートナーシップを活性化させようとしていることに共感するとともに、三重県の魅力発信にまつわる映像制作業務を主とする伝七ステーションとしてどのようなことができるのか、模索し、挑戦を続けています。

この度は、三重県が目指すビジョンに共感する事業者の立場として、伝七邸プロジェクト及び伝七ステーションのご紹介を通じて、私たちが進めている価値創出についてお届けします。

伝七邸の歴史

私たちが進める伝七邸プロジェクトの拠点となるのが、四日市市高砂町にある「伝七邸」です。伝七邸は、明治大正期の企業家、第十世伊藤伝七翁（1852年～1924年）が別邸として1896年（明治29年）に移設されたのが始まりで、約600坪の敷地のうち、「玄関棟」と「さつき棟」の2件が国の登録有形文化財（建造物）として登録されている他、2階建ての木造建築と日本庭園、離れを擁しています。

第十世伊藤伝七翁は、伊勢国三重郡室山村（現在の三重県四日市市四郷地区）出身で、酒造業の伊藤家に生まれ、製糸王と呼ばれた第五世伊藤小左衛門翁の遺志を受け、三重紡績を創設。渋沢栄一の知遇を得て、大阪紡績と合併し、後に東洋一と謳われた東洋紡績を創設した実業家で、四日市倉庫株式会社（現在の日本トランスシティ株式会社）や、三重鉄道、四日市商業高校など、様々な産業を手掛けてこられました。また、第十世伊藤伝七翁は、実業にとどまらず、1918年（大正7年）に貴族院多額納税者議員に当選する他、私財を投じて三岐鉄道の基礎となる日本横断鉄道の計画、1921年（大正10年）に四郷村役場（現在の四郷郷土資料館）を建築して寄贈するなど、地域の発展に大いに貢献した人物です。

伝七邸は、1906年（明治39年）から「料亭浜松茂」として皇室関係者や政財界、芸能界の有名人から愛される要人御用達の迎賓館的な存在となり、映画のロケ地になるなど、「近代産業発祥の地、四日市」の象徴であり続けましたが、2017年（平成29年）建物の老朽化と後継者の不在を受け、料亭浜松茂が歴史に幕を閉じることとなりました。こうした中、代々、伊藤家と共に四日市産業の発展に尽力してきた九鬼家の十一代目 九鬼紋七氏が私財を投じて邸を取得し、これからの三重県の発展を創出する拠点として、第十世伊藤伝七翁の足跡を風化させることなく次世代に継承するとの想いを込め、同年、邸の名称を伝七邸と改め、伝七邸プロジェクトが始まりました。

伝七郎プロジェクトの基本軸

伝七郎プロジェクトは「ひとの和」、「さまざまな交流」という基本軸のもと、様々な業務を行っています。伝七郎はこれまでの長い歴史の中で、第十世伊藤伝七翁を訪ねるゆかりの方々、料亭浜松茂に集った方々、地域の祝言をはじめとしたお祝い事など、多くの方々の交流拠点としてあり続けてきました。私は第十世伊藤伝七翁が数多くの事業を興してきたのも、伝七郎という交流する拠点、サロンを有していたためではないかと思料しています。

交流は、ひとの出会いを通じて、多様な世代、異業種、異文化が交流することで、新たな発想や、人を介した出会いなど多くのきっかけを生みます。こうした考えに加え、伝七郎が本来持っている交流拠点としての強みを生かし、伝七郎プロジェクトは3つの事業を行っています。

最初に挙げるのが「コミュニケーション」としての飲食事業。次にESDスクールなどの「次世代教育」、そして「情報発信」です。現在、伝七郎プロジェクトは、邸の管理・運営、コミュニケーション部門を株式会社日本伝統ビュローが、情報発信部門を株式会社伝七ステーションが担い、次世代教育については両社が内容に応じて進めています。

インターネットテレビ 伝七ステーションの概要

伝七郎プロジェクトの情報発信部門である伝七ステーションは、「文化交流と情報発信で三重を元気にする新時代のマルチメディア・ネット

ワーク」を掲げ、2018年2月から、毎週木曜日、よる6時に4つ以上の動画を配信する形式で、株式会社日本伝統ビュローの情報発信部門として事業が始まり、2019年4月に情報発信部門が株式会社伝七ステーションとして分社化しました。動画の配信は三重県の魅力発信をテーマに、年末年始や大型連休を問わず毎週確実に更新してきたこともあり、現在、放送回は118回を数え、130社以上に及ぶ企業・団体のインタビュ映像を制作しました。取材先ごとに分割した映像を含みますが、動画数は700本を超え（2020年4月30日現在）、なおも制作を継続しています。

更新する動画は、多くのメディアと連携しながら制作を進めています。伊勢新聞社から記事の提供を受け、地域のニュースを幅広く取り上げる「伝七グローバルニュース」をはじめ、三重テレビにて毎週火曜日（12時から）放送している「三重県応援団」、東海ラジオにて毎週日曜日あさ8時半から放送している「伝七郎茶道塾」など、単なる自主制作にとどまらず、番組をメディアに配給し、多様な情報発信媒体によるリーチを行っている他、三重テレビ番組と東海ラジオ番組については、放送内容を伝七ステーションにてアーカイブ配信しており、ローカルインターネットメディアとしては類を見ない、新聞・テレビ・ラジオと連携したマルチメディア・ネットワークを形成しています。また、三重テレビ番組「三重県応援団」の番組制作にあたっては、多くの関係機関や企業と連携しています。昨年度より取り組みを始めた三重県観光連盟との連携による施設等の紹介を継続する他、近畿日本ツーリスト中部との連携による観光スポットの紹介、志摩観光ホテルの紹介映像では、四日市萬古焼作陶家、酔月陶苑の清水酔月氏ご夫妻にご出演いただくなど、多くの方の連携、お力添えのもと制作を行っています。また、新型コロナウイルス感染症の対応を受け、放送を見合わせているものの、今年度より新たに始まったコーナー「三重県応援団市町観光リレー」では、週ごとに津市、四日市市、桑名市、菰野町の紹介を行い、首長並びに関係部局の方にご出演いただくといった取り組みも始めています。

伝七ステーションの映像制作 における基本的スタンス

映像とひと口に言ってもアプローチには枚挙にいとまがなく、プロモーションビデオ、ドラマ、バラエティー、報道、ドキュメンタリー等、様々なアプローチがある中で、伝七ステーションが多くの制作実績を有し、特化してきたのはインタビュ映像です。三重県内の企業、芸術文化、伝統工芸、スポーツ、施設等の経営者や職人の方から直接お話を伺い、言葉や想いから価値や魅力について深く掘り下げるアプローチを続けてきました。

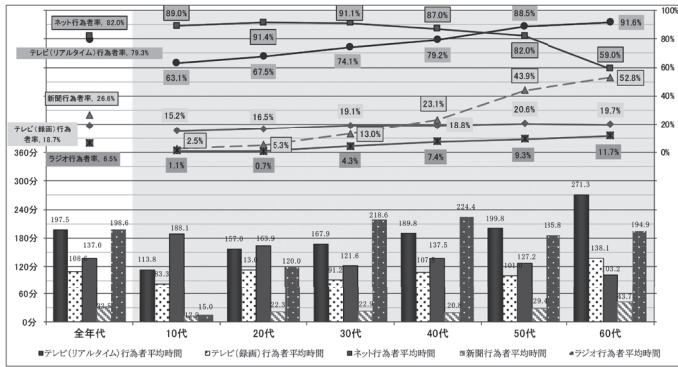
私たちは三重県に数ある魅力の中で「受け継がれてきたひとの想い」を特に取り上げたいと考えています。歴史とは、一つの価値創造に真摯に向き合った方がおられ、その想いが紡がれ、その時代その時代の要請に基づき、都度改善改良されながら発信され、顧客や受益者に受け入れられてきたこと。これを振り返って見た時間軸の経過を、歴史と呼称するのではないかと考えるためです。ひとが紡ぐ歴史をテーマとして捉え、これまでの価値を受け継ぎ、または新しく創造してこられた、ひとの内面にフォーカスを当てた映像となっており、「100年残る映像を目指す」という制作方針を打ち立てています。

撮影にあたっては、インタビュというよりも会話に近い形で進めることから、台本を制作せず撮影に臨むことがほとんどです。過去にはインタビュイーが質問に対する回答を検討されたうえで撮影に臨まれたことで、表層的な内容にとどまってしまうことがあったため、こうした手法を採用しています。映像はとても正直です。内なる想いか、用意した答えか、視聴者は一瞬で見抜きます。内なる想いから発せられた言葉の中には、その方が歩んでこられた歴史が垣間見えます。インタビュイーの心に寄り添い、番組を制作することが、内面を深く掘り下げることにつながり、想いや文化的な背景を知ることができます。そのような瞬間を、これまで多く目の当たりにしてきました。

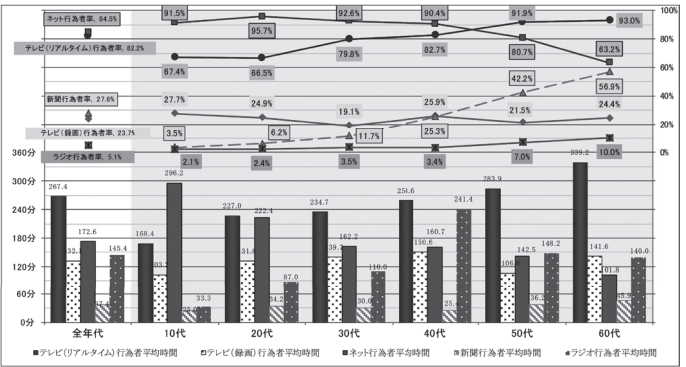
メディアを取り巻く傾向と 伝七ステーションのポジション

新時代のマルチメディア・ネットワークを冠する伝七ステーションにおいて、従来メディア（テレビ、新

平成30年度（平日）主なメディアの行為者率・行為者平均時間（全年代・年代別）



平成30年度（休日）主なメディアの行為者率・行為者平均時間（全年代・年代別）



※行為者率：調査対象者のうち情報行動を行った人の比率

聞、ラジオ等）とインターネットの利用状況における動向、各媒体が持つ特性を知ることが非常に重要だと考えています。

総務省情報通信政策研究所が2019年9月に発表した「平成30年度 情報通信メディアの利用時間と情報行動に関する調査報告書」において、平成30年度主なメディアの行為者率・行為者平均時間（全年代・年代別）の平日及び休日における、全年代の行為者率は、テレビ（リアルタイム）視聴79.3%及び82.2%、インターネット利用82.0%及び84.5%で、平日休日ともにインターネット利用の行為者率が上回ったと報告されています。

年代別で見ると、休日の10代におけるネット行為者率とテレビ（リアルタイム）行為者率との比較は24.1ポイント、20代は29.2ポイント、ネット行為者率が特に上回る状況で、この行為者率の差異は今後さらに顕著となることが予想されます。

しかし、60代においては平日△32.6ポイント、休日△29.8ポイントと、なおもテレビ視聴が上回る状況です。現況においては、インターネットの行為者率・行為者平均時間が拡大されることを見据えながらも、テレビ視聴が多い世代にリーチしていくことが課題と言えます。

一方で、着目したいのが「メディアとしての信頼度」及び「目的別の利用メディア」です。メディアとしての信頼度について全年代で見ると、最も信頼度が高かったのは新聞68.6%で、上述のメディアの行為者率・行為者平均時間調査においてテレビ視聴とインターネット利用の

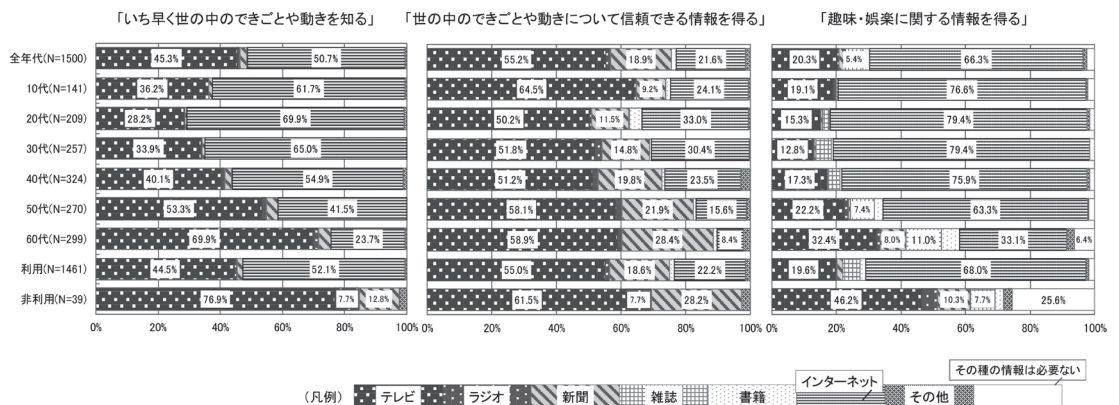
行為者率の差異が顕著であった若年層においても、テレビとインターネットの信頼度の比較は、全年代31.5ポイントに対し、10代が34.7ポイント、20代が20.1ポイントで、新聞、テレビが信頼できる情報媒体として依然、選ばれていることがわかります。

また、目的別の利用メディアでは、全年代で見ると「いち早く世の中のできごとや動きを知る」ためのメディアとしてインターネットが50.7%で多く、「世の中のできごとや動きについて信頼できる情報を得る」はテレビが55.2%、「趣味・娯楽に関する情報を得る」はインターネットが66.3%です。こうした調査報告から、行為者は従来のメディアとインターネットそれぞれの

平成30年度 各メディアの信頼度（全年代・年代別・インターネット利用・非利用別）

		平成30年度 各メディアの信頼度（全年代・年代別・インターネット利用・非利用別）			
		テレビ	新聞	インターネット	雑誌
全年代	全年代(N=1500)	63.7%	68.6%	32.2%	16.8%
	10代(N=141)	69.5%	63.1%	34.8%	20.6%
	20代(N=209)	55.5%	54.1%	35.4%	23.0%
	30代(N=257)	65.8%	72.0%	33.9%	22.6%
	40代(N=324)	62.3%	69.1%	31.5%	17.3%
	50代(N=270)	66.7%	75.9%	33.0%	11.5%
	60代(N=299)	63.9%	71.2%	27.4%	10.0%
インターネット	利用(N=1461)	63.8%	68.7%	32.7%	17.0%
	非利用(N=39)	61.5%	64.1%	12.8%	10.3%

平成30年度 目的別利用メディア（最も利用するメディア）（全年代・年代別・インターネット利用・非利用別）



役割を
・ 従来メディア・いち早く情報を得るには向かないが、信頼できる情報源であり、生産的な情報を得る媒体
・ インターネット・いち早く情報を得るための手段。情報根拠に乏し

くも（または情報根拠が必要とされない）趣味・娯楽に関する消費的な情報を得る媒体と捉えている志向がうかがえます。こうした報告から、従来メディアは、消費的な情報媒体から、より考えさせられる、ためになる生産的な情報媒体としてシフトしていくことが要請されています。一方で、インターネットは多様化する情報ニーズの受け皿として幅を広げながら、より信頼できる情報提供が選ばれていく傾向がうかがえます。

伝七ステーションは事業開始当初から、メディアにおける社会要請の変容を踏まえ、他メディアとの差別化をにらんだ運営を行ってきました。インターネットの課題である情報の信頼度を向上させるため、従来メディアとの連携を進めることで差別化を訴求する一方、100年残る映像を目指す制作方針から、短期的な視聴率によらず質を追求した、より考えさせられる、ためになるといった生産的な情報を従来メディアに配給することで、各メディアが持っている強みを合わせながら、マルチメディア・ネットワークとしての運営を続けてきました。

「伝七ステーションSDGs宣言」とこれから

冒頭でも触れた「SDGs (Sustainable Development Goals)」は持続可能な開発目標の略で、2015年に国連総会で採択され、2030年までに各国政府をはじめ、民間なども含め達成していく世界的な課題をまとめた「我々の世界を変革する」持続可能な開発のため

の2030アジェンダ」の中核をなし、17のゴール（目標）と169のターゲット、244の指標が設定されています。カラフルな正方形のアイコンはポスター、テレビCM、電車の車両など見かけるようになり、街ゆく人のスーツやジャケットの襟元に「カラーホイール」と呼ばれるSDGsのバッジを見る機会も増え、わかりやすいメッセージ性とデザイン、そして取り組む主体者がMGDs (ミレニウム開発目標) 以上に民間に広げられたこともあり、認知度はここ数年で急速に高まったように感じます。また、三重県においては、みえ県民力ビジョン・第三次行動計画において、Society 5.0とSDGsが取り入れられたことで、県内における機運もこれまでに高まっています。

私たちは映像制作の中で企業経営者や伝統を受け継ぐ職人の方のインタビューを通じ、理念や価値創出に向き合う想いをお聞きしてきました。例えば海女文化は、三重県が長い歴史から培ってきた、持続可能な社会の実現への取り組み事例の一つと言え、地域には私たちが想像する以上に、SDGsに当てはまる事例が身近なところに隠れています。これらを継続して発信していくことで、パートナーシップを携えながら、包摂的であり、文化多様性と文化の持続可能な開発に向けた生涯学習の機会が向上すると考えています。

伝七ステーション開始から2年以上にわたって、多くの企業・団体を取材したことで得た学びと、昨今のSDGsの機運が高まってきたこと

を受け、今年4月、伝七ステーションは「伝七ステーションSDGs宣言」を行い、「持続可能な三重県」創生に貢献することを宣言しました。

あわせて、伝七ステーションホームページでは、映像

などのSDGs

ゴールを設定・表記することを始め、三重県のSDGs映像プラットフォームとしての価値を創出していくため新たに動き始めました。

それぞれの映像ごとに表記するSDGs目標は、三重大学名誉教授・地域イノベーション学研究所特任教授朴恵淑氏のご協力のもと、専門的な知見から評価いただいたもので、過去に取材した三重県内の企業・団体130社それぞれの映像すべてに目を通していただき、SDGs

ゴールを設定していきます。今後制作する映像においても同様に進めていく予定です。その他「伝七ステーションだからできる」ような「ワクワクする」と感じていただけるようなSDGsゴールに向けた取り組みを企画し、具体化させていきます。

三重県の魅力である「受け継がれてきたひとの想い」を深く掘り下げた映像に、SDGsとしてのスポットライトを当てることで、伝七ステーションの役割にこれまで以上の意義が生まれ、三重県らしい、多様

性を受け、今年4月、伝七ステーションは「伝七ステーションSDGs宣言」を行い、「持続可能な三重県」創生に貢献することを宣言しました。

あわせて、伝七ステーションホームページでは、映像

などのSDGs

ゴールを設定・表記することを始め、三重県のSDGs映像プラットフォームとしての価値を創出していくため新たに動き始めました。

それぞれの映像ごとに表記するSDGs目標は、三重大学名誉教授・地域イノベーション学研究所特任教授朴恵淑氏のご協力のもと、専門的な知見から評価いただいたもので、過去に取材した三重県内の企業・団体130社それぞれの映像すべてに目を通していただき、SDGs

ゴールを設定していきます。今後制作する映像においても同様に進めていく予定です。その他「伝七ステーションだからできる」ような「ワクワクする」と感じていただけるようなSDGsゴールに向けた取り組みを企画し、具体化させていきます。

三重県の魅力である「受け継がれてきたひとの想い」を深く掘り下げた映像に、SDGsとしてのスポットライトを当てることで、伝七ステーションの役割にこれまで以上の意義が生まれ、三重県らしい、多様

性を受け、今年4月、伝七ステーションは「伝七ステーションSDGs宣言」を行い、「持続可能な三重県」創生に貢献することを宣言しました。

あわせて、伝七ステーションホームページでは、映像

などのSDGs

ゴールを設定・表記することを始め、三重県のSDGs映像プラットフォームとしての価値を創出していくため新たに動き始めました。

それぞれの映像ごとに表記するSDGs目標は、三重大学名誉教授・地域イノベーション学研究所特任教授朴恵淑氏のご協力のもと、専門的な知見から評価いただいたもので、過去に取材した三重県内の企業・団体130社それぞれの映像すべてに目を通していただき、SDGs

ゴールを設定していきます。今後制作する映像においても同様に進めていく予定です。その他「伝七ステーションだからできる」ような「ワクワクする」と感じていただけるようなSDGsゴールに向けた取り組みを企画し、具体化させていきます。

三重県の魅力である「受け継がれてきたひとの想い」を深く掘り下げた映像に、SDGsとしてのスポットライトを当てることで、伝七ステーションの役割にこれまで以上の意義が生まれ、三重県らしい、多様

性を受け、今年4月、伝七ステーションは「伝七ステーションSDGs宣言」を行い、「持続可能な三重県」創生に貢献することを宣言しました。

あわせて、伝七ステーションホームページでは、映像

などのSDGs

ゴールを設定・表記することを始め、三重県のSDGs映像プラットフォームとしての価値を創出していくため新たに動き始めました。

それぞれの映像ごとに表記するSDGs目標は、三重大学名誉教授・地域イノベーション学研究所特任教授朴恵淑氏のご協力のもと、専門的な知見から評価いただいたもので、過去に取材した三重県内の企業・団体130社それぞれの映像すべてに目を通していただき、SDGs

ゴールを設定していきます。今後制作する映像においても同様に進めていく予定です。その他「伝七ステーションだからできる」ような「ワクワクする」と感じていただけるようなSDGsゴールに向けた取り組みを企画し、具体化させていきます。



プロフィール

伝七ステーションメインナビゲーター
三重テレビ「三重県応援団」団長
株式会社伝七ステーション代表取締役

こう けつ とも ひで
頼 英

1982年愛知県生まれ。
名古屋市役所、NPO法人、法律事務所勤務を経て現在に至る。
番組制作指揮に加え、出演、楽曲制作等を行う。
島村楽器主催「録れコン 2014」総合グランプリ（クリエイター部門）受賞。

で、包容力のある持続可能な社会の実現を目指す、ひとつのきっかけになればと考えています。単なる映像制作にとどまらず、「ひとの和」、「さまざまな交流」を生み出す伝七邸プロジェクトの情報発信部門として、いかに価値を創出できるかという視点から、今後も忠恕に尽くしながらも活潑活潑地に努めていきます。



伝七ステーション SDGs宣言

伝七ステーションは、地域に貢献するWebメディア（ポータルサイト）として、国連持続可能な開発目標（SDGs）活動を推進。
三重県の魅力を伝える動画を制作し、これを基軸に地域のステークホルダーや関係者の皆様と共に、地域の魅力を活かした価値創造及び社会課題解決に取り組む、「持続可能な三重県」創生に貢献します。

6つのコンセプト

歴史・伝統文化・教育・観光などの地域の魅力、企業・自治体・団体の取り組みなどの「価値ある情報」を動画としてアーカイブ、6つのコンセプトをもとに情報発信・評価・交流・教育を促進し、2030年のSDGs目標達成を目指す。

- **質の高い動画制作**
 - 価値ある情報・地域のため、企業・自治体・団体・観光地などに適切な取材を継続的に実施します。
 - 携わる人の「思い」をストーリーにフォーカスした取材と編集で、三重県の魅力を伝える質の高い動画を制作します。
- **専門家による評価とアドバイス**
 - 企業・自治体・団体の動画については、SDGs取組・活動に対する有識者による専門的、中立的な評価とアドバイスのもと、価値を高めるコンテンツとしてリリースします。
- **動画のアーカイブ**
 - 制作した動画をWebサイトにアーカイブ。三重県の魅力を集約したポータルサイトをつくります。
 - SDGs関連情報と動画は、カテゴリー分けし、予測と実践を促進するプラットフォームとして構築します。
- **情報発信による地域活性化と観光誘致**
 - Web・テレビ・ラジオ・新聞等、マルチメディアを駆使して、三重県の魅力を国内外へ発信します。
 - 観光地や旅行会社とのネットワークを活かし、地域活性化及びバウンダリー観光誘致を促進します。
- **交流・学習の機会を創出**
 - 次世代教育を推進し、三重県の未来を担う人材の育成に貢献します。
- **ステークホルダーとのパートナーシップ**
 - 取材を通じた社会的交流により、SDGsを軸とした協創（共創）ネットワーク構築・運営します。
 - 持続可能な三重県の共通価値の創造（CSV）・課題解決に積極的に関わり、社会的責任（CSR）を果たします。



SDGsでは、「第一歩の踏み出し」を重んじ、環境・社会・経済の調和のとれた発展による、地域発展及び地球規模での持続可能な開発を目指しています。
伝七ステーションは、「卓越したクリエイティブ力」と「独自のネットワークを活かした発信力」に加え、「協創（共創）ネットワーク」による関係力にて、持続可能な三重県の発展を促し、未来に向けた発展を行います。